



葬式そうしきごっこ

亜蘭知子・作
浅倉田美子・絵

N.D.C.913 葬式ごっこ

亜蘭知子・作

浅倉田美子・絵

旺文社 1999年

143p. 22cm

(旺文社創作児童文学)

亜蘭知子（あらん ともこ）

1958年、青森県弘前市生まれ。19歳で作詞家になり、TUBEの「シーズン・イン・ザ・サン」をはじめ、数多くのアーティストたちに作品を提供してきた。

81年からは、自らもアーティストとしてアルバムを発表するほか、執筆活動、TVのコメンテーターなど幅広い活躍をしている。

かねてから子供のいじめ問題に関心を持っていた著者が、『「葬式ごっこ」八年後の証言』との出逢いをきっかけに、子供たちにも知ってもらいたいと本書を執筆した。

浅倉田美子（あさくら たみこ）

1962年、神奈川県生まれ。1982年、中央美術学園卒業。

カード、CDジャケット、教科書、NHKテキストなどのイラストを制作。紙粘土を使った人形、お面なども手がけている。

葬式ごっこ

亜蘭知子・作

浅倉田美子・絵



旺文社

もくじ

1 シシ君が死んじゃった 4

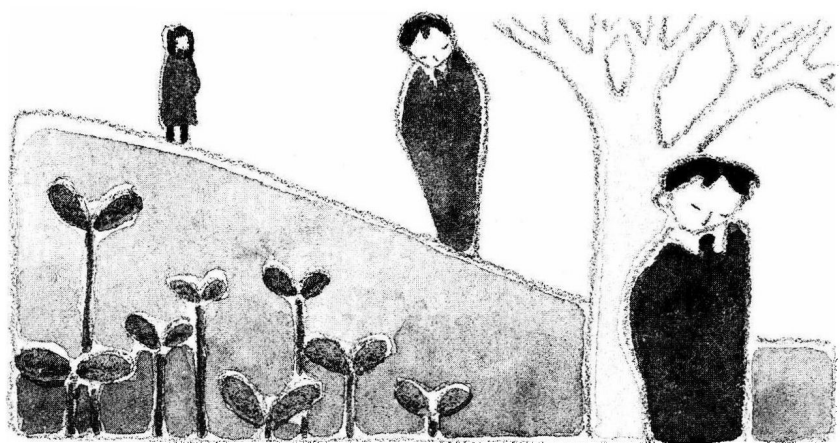
2 シシ君の遺書^{いしよ} 13

3 うちの親、離婚^{りこん}しちゃったんだ 28

4 葬式^{おくりびと}ごっこ 40

5 ミキオちゃんの危機^{ピンチ} 54

6 良子^{りょうこ}おばさんの話 60



7 お前は鹿川^{しかがわ}二世だ 77

8 死までの八か月 86

9 暗いトンネル 95

10 春分の日 110

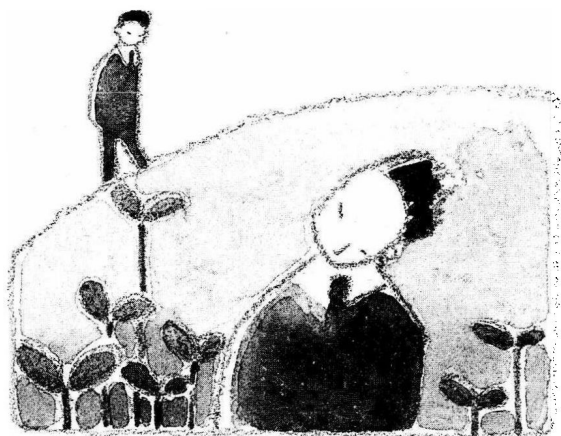
11 大きな宿題 120

あとがき 138

八年後の拓朗^{たくろう}たち

豊田 充

140

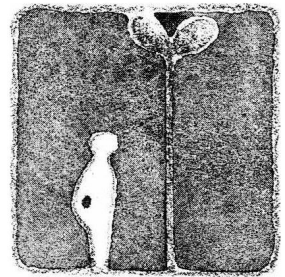


1 シシ君が死んじゃった

シシ君が死んだあの日のことは、きっと一生わすれられないと思う。ほくにとつては、身近な人間のはじめての死だった。「死ぬ」ってことがどういふことなのか、きつとまだよくわかっていなかった。

同級生の鹿川君^{しかがわ}は、みんなにシシとか、シシ君ってよばれていた。「親友」っていうほどのすごく仲よかったわけじゃないけど、中二の始めのころは家に遊びにいったりして、けっこう仲がよかった時期もあった。

その事件^{じけん}が起きたのは、ほくたちが中学二年の冬。三学期が始まって、一か月くらいのことだった。



なんてことないふつうの日曜日。ぼくは居間で、ボーッと別におもしろくもないテレビ番組を見ながら、昼ごはんができるのを待っていた。とつぜん電話がかかってきたのは、そんな時だった。友だちのタツヤからだった。

「拓朗、テレビ見た？」

「テレビ？ 何の？」

「ニュース。今、やってるよ。シシ……鹿川がさ……自殺しちゃったんだって」

「え！ 何、それ」

何のことかさっぱりわからずに、ぼくはあわててテレビのチャンネルを変えた。

「現場には鹿川君が書いたとみられる遺書が残されており、遺書の内容などから、盛岡署ではいじめを苦にした自殺とみてくわしく調べています」

たんたんとした口調で、アナウンサーがしゃべっていた。ドラマか何か見ているような、変な気分だった。これはドッキリカメラだよ、きっと……と、ぼくはマジで思った。

「何だよ、これ。こんなのありかよ……」



ぼくは受話器を耳にあてたまま、ひとりごとみたいにつぶやいた。

「シシのヤツ、おとといから家出してたんだって……。はじめつから死ぬ気で家出したのかな、あいつ……」

「シシが自殺？ 何でシシが死ぬんだよ……」

そんなこと絶対^{ぜったい}に信じられないのに、気がつくと体じゅうにとりはだが立っていた。

「おまえ相談とかに乗ってやれなかったの？ って、母ちゃんに言われちゃったよ。でも、あいつ最近あまり学校に来なかったし、死ぬほどなやんでるなんて知らなかったよなあ……」

知らなかった。まさかこんなことになるほど、シシ君がなやんでるなんて、全然知らなかった。

電話を切ったあとも、体のふるえがなかなか止まらなかった。そのうちにわけのわからない怒^{いか}りがこみあげてきて、ぼくは思わず、

「チキショー、チキショー」

と、さげびながらテーブルをたたいていた。

「タク！ どうしたの？」

台所にいたお母さんが、エプロンで手をふきながら飛んできた。お母さんの顔を見た
とたん、涙が^{なみだ}あふれた。

「タク……、いったい、どうしたの？ 何があったの？」

お母さんは心配そうに顔をのぞきこみながら、そつと^{かた}ぼくの肩に手を置いた。

「シシが……鹿川が死んじゃったって」

「え！ 鹿川君が？ 何で？ 事故^{じこ}？」

ぼくはだまって首を横にふった。そして、言った。

「いじめを苦にした自殺だって……」

「いじめって……、どういうこと？ 学校でそんなにひどいいじめがあったの？」

ぼくはまた、だまって首を横にふった。

「いじめられてるのは見たことあるけど……死ぬほどなやんでるなんて知らなかった……」

ぼくには、そう言うのがせいっぱいだった。

「大変なことになっちゃったわねえ……。まさか、うちの中学でこんなことが起こるとはねえ」

お母さんはそれっきり昼ごはんの用意どころではなくなり、友だちのお母さんに電話をかけたり、かかってきたりといそがしくなってしまった。

「鹿川さんの家って、家庭環境^{かんきょう}がふくざつだったからねえ、こんな時、お母さんが家にいたら、もう少しちがっていただろうにねえ」

長電話をしているうちに、お母さんはすっかりぼくの昼ごはんのことはわすれてしまったようだった。ぼくもとても食べられる気分じゃなかったから、別にいいけど。

夜になって、外出先からお父さんが帰ってきた。だれかから聞いたらしく、もう鹿川君の事件^{じけん}のことは知っていた。

テレビの娯楽番組^{ごらくばんぐみ}を見ていたぼくを見て、お父さんはあきれたように言った。

「お前、友だちが死んだっていうのに、こんなの見てていいのか？」

ドキッとした。

ぼくだって、いつもみたいに楽しんで見ていたわけじゃない。なんとなく……見てしまったんだ。いつものクセで。

だけど、友だちの死をちっとも悲しんでないように思われたのがシヤクで、ぼくはふてくされて二階の自分の部屋に上がってしまった。

正直言って、ぼくはほんの一瞬^{いつしゅん}でもシシ君のことをわすれていたかった。シシ君が自殺^{そうじく}した場面を想像^{そうぞう}すると、悲しいというよりも何だかこわい気がした。

（死ぬのって、どんな感じなんだろう？）

考えたくないのに、つい変なことばかり考えてしまう。いたくなかったんだろうか？ 苦しくなかったんだろうか？ それでも、死んだ方が楽だって思ったんだろうか？

死ぬほどの勇気があれば何でもできるような気もするけど、それって、生きている人

のあまい考えなんだろうか。少なくともぼくには、とても自殺する勇氣なんかない。勇氣？ 自殺することを勇氣とよぶのだろうか？ あれこれ考えてると、頭がいたくなる。もう、何も考えたくない。みんなわすれてしまいたい。

ふとんを頭からかぶつてもがいていると、ぼくの様子を見に、お父さんが上がってきた。お父さんはドスドスツとゆつくり階段かいだんをのぼってくるから、足音ですぐわかる。

何を言われるんだろう？ と、ぼくはちよつとキンチョーして、ふとんの中でじつとねたふりをしていた。

お父さんはガチャツと部屋のドアを開けると、ぼくのそばに来てちよつと立ち止まり、そのまま何も言わずにガラガラツとぼくの部屋のまどを開けた。冷たい冬の空氣がすうと部屋に流れこんできたのがわかった。そおつと目だけふとんから出して見ると、こちらに背せを向けたまま、お父さんはまどの外を見ていた。

「さすがに、もう取材のヘリコプターは飛んでないな。明日は大変だぞ、きつと。さつき学校の連絡網れんらくもうで、明日は通常通り登校つうじょうしてくれって言ってたぞ」

ぼくはびっくりして、ガバツとベッドから飛び起きた。

「え？ 明日、学校あるの？」

「まあ、いつも通りの授業じゅぎょうってわけにはいかないと思うけど、全校集会とか校長の事情じじょう説明とかあるんだろ？ 先生方も今ごろパニックだろう……、こんなことになったんだからな」

明日のことを思うと、ますます気が重くなった。ぼくは肩かたで大きくため息をついた。

実は、シシ君の死の知らせを聞いた時から、ずっと心にひっかかっていたことがあった。ぼくは、まだまどの外を見ているお父さんの背せなか中なかに向かって、ぼつりぼつりと話した。始めた。

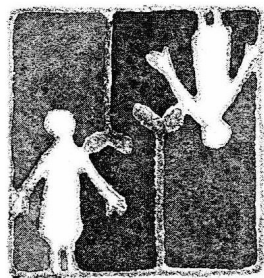
「明日、学校に行くと、シシのつくえに花なんかかざってあるんだろ……。実はぼくたち、前に葬式そうしきごっこみたいなこと、やったことがあるんだよ」

2 シシ君の遺書^{いしよ}

次の日、月曜日の朝刊^{ちようかん}には、デカデカとシシ君の自殺の記事がのった。シシ君の写真は、ちよつとおこっているような顔に見えた。どうせなら、もうちよつといい写真を使つてやればよかったのに……とぼくは思った。

朝刊^{ちようかん}には、シシ君が発見された時の様子がくわしく書いてあつた。

三十一日から家出をしていたシシ君は、二月一日の午後十時すぎ、盛岡^{もりおか}の駅ビルの地下街のトイレで、首をつつて死んでいるのを発見された。午後九時の閉店後^{へいてんご}、トイレのドアがしまつたままなのを変に思った警備員^{けいびいん}がのぞいて発見し、警察^{けいさつ}に通報^{つうほう}した。足もとのすぐ目につくところに、紙の買物ぶくろを破^{やぶ}つてエンピツで書いた、シシ君の遺書^{いしよ}があつた。新聞には、その遺書^{いしよ}の全文がのつていた。



家の人、そして友達へ

突然姿を消して、申し訳ありません。

（原因について）くわしい事については○○とか××とかにきけばわかると思う。

俺だってまだ死にたくない。だけどこのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ。

ただ、俺が死んだからって他のヤツが犠牲になったんじゃないじゃないか。

だから、もう君達もバカな事するのはやめてくれ。最後のお願いだ。

一九××年二月一日

鹿川裕史

ぼくは、遺書の中の消されたところには、たぶん、いじめグループの隆介とマサシの名前が書いてあったんだろう、と思った。

何で盛岡に行ったんだろうと書いていたら、盛岡には、シシ君のお父さんの実家があ

るということだった。子どものころ、シシ君はよく盛岡へ行ったらしい。

「かわいそうに鹿川君……。もう少し早く見つかつていればねえ……」

お母さんは、新聞を読んで目に涙をためていた。なみだ

「鹿川くんのお父さん、一日の夜中まで、ゲームセンターとか公園とかを探しまわって
たんですって。でも、その時はもう、東京にはいなかったのよね……」

シシ君のお父さんが、シシ君がもう死んでしまったことも知らないで必死に探しまわ
っていたすがたを想像すると、何だかすごく悲しかった。

ゆうべはショックでなかなかねむれず、気がついたら、もう朝になっていた……。とい
う感じだった。顔をあらってからも頭がボーッとして、なかなか調子が出なかった。朝
ごはんもあまり食べられなかった。

「タク……あんたまで、たおれないでよ」

いそがしい朝は「早くしなさい」とか「おくれるわよ」とか、いつもはガミガミうる